

素晴らしい須走を知りたい!

「素晴らしい隊」養成講座 第5回講座概要

第2部：座学 富士山を学ぶ

■日時

令和2年11月28日(土) 9時～12時

■場所

須走コミュニティセンター

■講師

○宍野 史生 富士道第十二世 神道扶桑教第六世 管長

■講義概要

1. 登拝の写真／富士道 神道扶桑教



一吉田口(北口)。六合目の経が峰。ここで日蓮上人様がお経をしたためた所。馬返しから上がり、五合目の佐藤小屋から次の到達地点が経ヶ岳を通過していく。ここが天地の境。草木が生えない。



一六合目の花小屋。ここから山小屋が順番に続いていく。



一ずっと登っている所。雲が下にある。七合目位、八合目の手前。



一七合目から八合目に上がる所。大きな岩がある。これが亀岩と言われる所。下から見ると亀さんが富士山に乗っているように見える。「蓬莱山 亀岩 八大龍王権現 火伏風雨の御守護神様」と言って私たちは拝ませてください。大きな亀の形をした亀岩。

一亀岩の下の方、普通の登山道から少し入る。一般の方はとても入れるような所ではない。我々はここまで入ってお参りをさせていただく。ちょうど亀の背中の一番下のところ、小さな窟になっている。ここにお参りをするが、亀岩八大龍王権現様をお祀りしている窟。ここからポタ



リポタリと清水が沸く。小さなポリバケツに2日で一杯なるくらい。樋を作り

り、バケツに落ちるようにしてあり、ここが標高で一番高い所にご鎮座する龍神様。龍神様の総本宮、総元締め、大親分という位置づけでお参りさせていただいている。ここにお参りに行く時は、下から少しお水を持っていく。小さいペットボトルにお水を入れて、中に石の龍神様をお祀りしてあるので、その龍神様にお供えをして、バケツの所から靴のお水を一杯だけ頂戴をして、飲ませていただき、お参りをする。標高にして一番高い所にある龍神様なので、別称を「水配りの龍神様」と申し上げている。なぜか？経ヶ峰が天地の境。あそこから上が木は生えない。木が生えないという事は水がないという事。富士山は砂地の山、五合目の古御嶽神社 古御嶽は一番最初にできた岩山。だから古御嶽神社の御祭神にイワナガヒメノミコト様をお祀りしているし、先にできたからイワナガヒメノミコト様はお姉さんということ。そのあとできたのが富士山。砂山の富士山。富士山は妹のコノハナサクヤヒメノミコト様。砂地なので水が溜められない。だから木が生えない、植物が育たない。しかしここは石清水が湧いている。標高最高の石清水。富士山は我が身に水を持たずして、七合五勺の龍神様の所から全国各地に天の恵みの水を等しく分け与えるので「水分(みくまり)の龍神様」、「水配りの龍神様」と言って深くお参りをさせていただく。誠に有難い龍神様。我々にとって何が一番大事か、生物にとっては水。水は恵み。この恵みを与えてくれるのが富士山である、というのが富士山への信仰の一つ。火を噴く山なので大変畏れた。だからどうか火を噴かないでくれ、噴火をしないでくれと富士山に対して祈りをあげる。富士山から恵みを頂く宝の山。我々は6月3日に火を焚いて開山の神事を行う。そして山へ登る。富士山は火で開いて、また火で閉じる。その時に必ず水との縁が切れない。水で禊をして、登って、水のない御山へ上がり、水の有難さを教えられて、山を下りてくる。私たちの一つの行。

一八合目に天拝宮というお宮があり、ここが一つの富士登拝のベースキャンプになっている。富士山天拝宮。藤原東覚角行様が御神意を頂いて作られた御神實(みかんざね)、五寸の鏡。仙元宮という文字を打っている御鏡。この御鏡を背負って私たちはこの天拝宮へ上がり一ヶ月間このお宮に奉安する。時として御頂上へ御鏡を背負って「天拝神事」という秘密の神事を行う。私とお供の二人で行く。金明水の所で真夜中に神事をする。光がないので満点の星空の中で角行様から伝わった秘密の神事をする。終わったらまた八合目へ御鏡を奉安させていただき、登ってこられる講社の皆様、大勢の方々が お参りされるので道中安全の御祈願を受ける。





一天拝宮の中。狭い所。



一お天気のいい時。青空が見える。



一日の出。ご来光。

一山を下り大塚山。富士山北口浅間神社の少し北。ここで景行40年、西暦110年に日本武尊様がここから拝んだという小さな山。そこから富士山を拝んだとされている。



一大塚山の入口。そんなに高くない。

一これは大塚山の前に炊き上げとい



う富士講独特の神事を行っている所。下に湿らせたお塩を置いて、その上に赤線香というお線香。昔は、先達が線香を作っていた。富士山のヒノキの葉を乾かして、やげんで擦ったものに米粉かもち米粉を混ぜて作る。お山の形にして、拝みが始まると真ん中に一本立て、両脇の脇先達がずっとお線香を御山に刺していく。先達が「懺悔懺悔六根清浄…」と唱えると最後にポッと付く。火が付くと一気に火が上がる。龍神様でお水を少しもらって帰り、それで墨を刷り、焚き札をしたためる。三角に折って、火をつけるとそのままシュッと上がる。これがさっと上がると我々の願いが神様の元に届いたということ。



一ご来光を拝んでいるところ。

—神道式のお墓。青山墓地にある青山霊園でのお祀りの様子。向こう側に剣のように長く立っているのが初代管長宍野半のお墓。今祝詞をあげている。手前は下方上円墳を模している。



2. ご開祖様角行様生誕 480 年

—富士山を開いたという史実は色々とある。このお軸をご覧ください。

資料の写真、一番上が角行様のお姿。この軸は角行様のお軸。木版でお姿を頒布したようだ。角行様は一尺四方の木の上に立っている。角行様はお生まれになったのが、天文 10 年、旧暦で 1 月 15 日、グレゴリオ暦 2 月 10 日、西暦 1541 年、来年 480 年のご縁年。その後、御年 18 歳の時、永禄元年に岩手の達谷窟(たっこくのいわや)というところで修行をしていたが、神様仏様から富士へ行けと言われて富士を目指す。この年を富士道の回帰の年とさせて頂いている。それから 14 年位かかり、元龜 3 年 6 月 3 日にご開祖様は富士山頂にお立ちになる。14 年かかったのは、昔は富士山に登れる期間は一ヶ月間くらいなので、その間一合目から道を作り、翌年に二合目まで作り、とルートを作りながらなので 1572 年までかかり、その 6 月 3 日にお頂上に立たれる。今から 448 年の昔。富士講では、この 6 月 3 日を富士山開山の日とさせて頂いており、旧暦の 6 月 3 日、今でも 6 月 3 日に「開山御神火大祭」というお祭りをやらせていただき、お炊き上げの大型版をやる。



—角行様はどんな人？宮内庁掌典の堤さんから頂戴した資料「富士山行者元祖代々系図」。「正三位中将左近太夫藤原久光卿実男長谷川左近之助と云う人なり」。生まれは肥前長崎。天文十年正月十五日生まれ。ここに書いてあるのが、元和 6 年人穴村御浄土山にて、方六尺の材木に立ち 100 日のつま先立ちの行をした、ということ。お父様が大和国司藤原綱平。29 代の孫長谷川重従三位久光。お母さまが二条従三位藤原清安女。堤さんが調べ、書き写し間違いでお父様が藤原綱手ではないかという説になった。綱手は実在する。藤原鎌足の息子の藤原宇合の息子に綱手がいる。この方は長崎で最後を終えたということなので、綱手の 29 代目の後胤ということになると判明した。のちに人穴御浄土にてご修行をなさる。今富士宮市にある人穴でのご修行で、そこで角行様は「西口御浄土末世御助けの為に昼夜六度の垢離を取り…」と拝む。お炊き上げの時も「懺悔懺悔六根清浄…」と唱える。江戸時代の民衆信仰の中では仏教色も十分にあったと思われる。「こうくうたいそく妙王そく体十方こうくう心」という神様からのお言葉をいただいたのが角行様。角行様がお示しいただいたこの御神語を我々は今もなお 450 年以上、この御文句をもって富士山を礼拝している。富士山は一つの山だが、ずっと眷属、大山・小田原・高尾・こみね・古御嶽という、この周辺も一つの巡拝、神様仏様も併せて全てに支えられて富士信仰が支えられているということではないかと思う。

3. 質疑応答

Q. 資料の中で角行様が六尺の材木の上に一寸二勺の杖を持って立っているとおっしゃっていたが、なぜこのような修行をするのか？

A. 穴へ入るとき、昔は長靴を持っていった。人穴の中は水浸しだった。長靴から水が入ることはなかったが、奥まで入るときは地下足袋ではびしょびしょになる。角行様は水が溜まっているので木の上で御行をしたのではないか。しかしここ 20 年くらいは水がない。地下足袋のまま汚れずに 150m 位水奥まで入れる。御内院のところも水がない。当時は水浸しの穴だったのではないかと思う。

宋野氏：私どもの古い資料の中で、明治 15 年に富士講がまとまって神道扶桑教というものになる。

その時のリーダーを務めたのが宋野半。宋野半が明治になり教部省の役人として、駿河国大宮、今の浅間大社の官幣中社になっての最初の宮司として赴任するが、その時から富士講の人たちと交流が深くなっていった。そして一緒に富士山を登るようになり、その時はまだ富士講が禁圧されていた。五榜の掲示の「切支丹・邪宗門を禁ず」の禁圧団体の一つになっていたので自由な活動ができない。しかし講社は「江戸八百八町に、八百八講あり、講中八萬人」と言われていたほど大変賑わっていた。その人たちの願いを受けて禁圧をほどいてもらいたいと言って、この禁圧を有栖川宮様をお願いしてほどいてもらうが、その時、扶桑教は北口教院と東口別院がある。東口はここ。その場所は分からないが、米山佐久間、米山重郎、小松金弥、小野義方、高村みきさんという方々がこの須走の東口別院の主要メンバーとしておいでになったという記録が残っている。今から 150 年くらい前になるが、古い資料が残っていると思うので、捨てないでほしい。教えていただけたらと思う。

Q. 今日の衣装の説明をしてほしい

A. お山へ登る時のもの。足元は、今は地下足袋。手甲、白い装束で、たっつけの山袴、私は鉢巻を巻いている。昔の先達は宝冠というものを巻く。宝冠を被ると大先達。御頂上を 7 回務めて、初めて御中道を回ることが可能になる。御中道を三回務めないと先達と言われない。今は大沢が崩れて御中道を回れない。佐藤小屋から時計回りに回る。12 時間で回ると言われていた。早朝回ると、夜には戻ってこれた。私は時々、逆手で御中道を見るために大沢まで行くが、去年行ったときは大沢までも行けなかった。一の沢で落ちている。お中道を 3 回回って初めて宝冠をかけられる。あと、クマ除けに鈴をさげる。鈴が鳴ると、上の山小屋はそろそろ〇〇講が来たよ、とお迎えに上がってくれる。拝むときにこれを鳴らす。

Q. 御中道が歩けなくなっているという事は、日本のなかで先達は生まれませんか？

A. ほぼ辺野古のジュゴン状態。レッドカード。東口は斉藤先達が最長老。彼が言うには、甲州街道を通って上がっていく日本橋の講社は三崎半島から、西の講社は須走を使ったという。だからこの東口と北口が当時も登山者が多かったと思う。日本橋の講社も登って、東口へ下り、足柄の最乗寺さんへお参りをして、小田原の大山へお参りをして、時間とお金に余裕のある所は江の島へお参りをして、日本橋へ帰ってくるというのがスペシャルなコース。